

神戸・大阪巡検（2月1～3日）

今回の巡検のテーマは、大都市のかかえている住宅や都市災害の問題を、東京と比較しながら考えてみることであった。

2月1日、12:00。新神戸駅に集合。駅には私達の大先輩の藤岡ひろ子先生が待っていて下さった。藤岡先生の案内で神戸港へ。神戸は、南は大阪湾、北は六甲山地にはさまれ、南北の幅は広くても2kmという狭い土地に位置しているため、街は東西に発達し、南北に走る道路はすべて坂道だ。港の見学の後、明治の面影が所々に残っている街並を見ながら、坂道を上って山本通りへ。洋館が並びいかにも神戸らしいたたずまいだ。本町へ出て国電で須磨の国民宿舎に向かった。

2日目、朝から小糠雨のそぼ降る寒い一日。戦前の財閥村であった住吉の観音林。昭和13年の大洪水の記念碑。六甲の山腹を大規模に切り崩して造成中の渦ヶ森住宅地。芦屋の六麓荘町の高級住宅地などを見学した。藤岡先生、神戸女学院の小林先生、神戸大学の田中先生が一日中私達と同行して下さった。なぜ観音林や芦屋が高級住宅地になったのか、昭和13年の大洪水の後、どのような土地改造によって洪水を防いでいるか、六甲山腹に造成中の住宅地の問題点は何か、等々、4人の先生方に細かく説明していただいた。又、私達の方からも自由に活発に質問が出された。

3日目、須磨から国電で新大阪駅へ。駅周辺の再開発が進んでいるようすを見た。それから日本の田園都市運動の始まりである千里山住宅地、その北に大規模に広がる千里ニュータウンを見学した。第一次世界大戦後の好景気を背景に、大正9年から8年かかって完成した千里山住宅地は、日本の山の手住宅地の典型となった。第二次世界大戦後、中産階級の増大、大都市の人口集中によって現われたのが、高層アパート群からなるニュータウンである。千里山住宅地と千里ニュータウンは戦前、戦後の社会構造の変化に伴う住宅地の変化であろう。

ある場所に、ある物が立地している。なぜそこに立地しているのか……と一瞬立ち止まって考えることによって、いかに多くのことに気付くものだろう。関西になじみが薄く、今まで東京の方が大阪よりもすべて進んでいると思っていた私にとって、今回の巡検で眼が開かれる思いだった。寒い中で巡検であったが、よく歩き、観察し、そして考え、地理学的な物の見方が一段と深まったような気がする。

（正井先生指導 2年 宇津巻陸子）

三陸巡検（9月5～8日）

まだ暑さの酷しかった9月5日夕刻、私達の三陸巡検が始まった。今回のテーマは「三陸の養殖業と防災対策及び製鉄業について」というものであり、この3泊4日の巡検は次のような経過をたどっ